

日本の外来種問題とアフリカマイマイ

富山清升（鹿児島大学理学部）

2007年10月に、鹿児島県の出水市と指宿市で、初めてアフリカマイマイの本土侵入が確認され、マスコミを巻き込んで、一時期大騒動が起きました。本種は「特殊病害虫」に指定されているため、侵入情報は逐一公開しなければならない、本種に対する一般の無理解によって騒ぎが増幅されたきらいがあります。本種は広東住血線虫というネズミの寄生虫の中間宿主になっており、2000年に沖縄でヒトの感染死亡例もあるため、一部マスコミによって「恐怖の動物」に祭り上げられてしまいました。しかし、広東住血線虫そのものは、既に全国に定着しており、中間宿主もナメクジ、カワエビ、ザリガニ、ジャンボタニシ、かえる類と多彩です。また、広東住血線虫は、中間宿主を生で口に入れない限り感染しません。皮膚感染もしませんので、中間宿主を素手で触っても大丈夫です。寄生虫の中間宿主として、アフリカマイマイだけをことさら警戒しなければならない根拠はありません。今回は、アフリカマイマイのこれまでの研究をふまえて基礎生態を紹介することで、外来種としてのアフリカマイマイの特性を紹介してみたいと思います。

鹿児島県本土に生息するマングースの現状

船越公威（鹿児島国際大学国際文化学部）

特定外来生物種マングースが喜入地区で生息が確認されて以来（昨年6月）、捕獲防除が7月から開始されてほぼ1年が経過した。その間の捕獲数（捕獲率：喜入地区を中心として）の推移、聞き込みなどによる分布域の状況、周年を通じた食性変化、繁殖特性（交尾期、出産時期、一腹産子数、幼獣の独立時期など）のデータを蓄積してきた。これらの基礎資料に基づく生態系への影響や今後の対策などについて報告する。

日本発外来ワタリガニの根絶漁具の開発について

ミゲル・バスケス（鹿児島大学水産学部）

船舶のバラスト水による外来動物の侵入は、多くの国々で重要な問題になっている。日本からも数種の甲殻類が海外に侵入し、在来生物と住み場所や資源を争ったり、病気を運んで漁業や養殖業にダメージを与えているが、このような被害は逆の場合にも予測されることであり、効果的な根絶方法や罟の開発が必要とされている。今回は、漁業用のカニ籠を外来ワタリガニの根絶に利用できるよう改良した例を紹介する。伝統的な罟を改良し、罟の形、入り口、網目の大きさによって対象とする種を捕獲できるようにした。根絶のための漁具では、入り口を見つけやすいことに加えて、対象外の生物が入った場合や罟が放棄された場合は捕獲物が逃げられるという点が重要である。また、獲物のサイズより数が重要なため、網目の細かいものが求められる。

外来生物問題の考え方～まずは、鹿児島の外来魚の事例から～

中井克樹（滋賀県立琵琶湖博物館）

「外来生物」と聞けば、積極的に駆除し根絶すべき対象だという印象が抱かれがちです。このように外来生物が問題視されるのは、外来生物のなかにさまざまな悪影響を及ぼすものがあることが、次第に認識されるようになったからです。こうした経験から、深刻な影響に対して即座に対処するのはもちろん、放置すると状況悪化が予測される場合にもなるだけ早期の対応が大切であることが分かってきました。つまり、外来生物問題においては、その外来生物が現在及ぼしている影響を把握し、まだ目立った影響がなくとも潜在的なリスクを推測することが大切です。このことを、鹿児島県の外来魚を例に具体的に考えてみたいと思います。また、今回のシンポジウムで紹介されるアフリカマイマイやジャワマングースへの九州側と琉球列島側における異なった対応についても、理解が進むことと思います。外来生物への対応は、対象種と地域によって是々非々で、ということなのです。